反ユダヤ主義について

マーク・マゾワー著

歴史の文脈から解きほぐす

言葉は時間や場所が変わると、意味が容易に変化する。反ユダヤ主義という重い言葉も例外でない。

反ユダヤ主義なる語は、1879年にドイツで現れ、やがてヒトラーが欧州征服の戦争イデオロギーの中核に据えたことで世界中に広まった。ユダヤ人が各国の国民に何らかの影響を及ぼすと危ぶんで反発するイデオロギーも反ユダヤ主義であろう。また、過去から伝わるユダヤ人に関する古びて陳腐な偏見の膨大な寄せ集めも反ユダヤ主義である。しかし大事なのは、この2つの動きの延長にホロコーストが出現した事実を理解することだ。このために、いつも具体的に歴史の文脈で反ユダヤ主義をとらえる努力が必要となる。



原題＝ON ANTISEMITISM
（山岡由美訳、みすず書房・4730円）
▼著者は米コロンビア大歴史学教授。専門はバルカン近代史。

著者は、反ユダヤ主義がイスラエル批判とは異なると強調する。それが政治的に定義されることで、イスラエルへの政策批判を封じ込める装置になりがちな風潮に警戒を促す。ネタニヤフ首相のガザ侵攻によるパレスチナ市民の大量犠牲は、ハマスによるテロの責任として甘受すべき反ユダヤ主義の代償と言えるのだろうか。21世紀の反・反ユダヤ主義運動は、幅広い反人種主義闘争から離れて、世界各地のユダヤ人にとってのイスラエルの重要性を特別視し、国際政治でしばしば非難されるイスラエルの政治外交と結びついた。

いまでは、国際ホロコースト記憶連盟（IHRA）という地味な組織の反ユダヤ主義に関する定義がよく使用される。IHRAは、ユダヤ人民の自決権の否定や、イスラエルの存在を人種主義の企てと批判するのを反ユダヤ主義かもしれないと問題を複雑にした。著者によれば、かつて反ユダヤ主義と闘うことはエスニック・ナショナリズムと闘うことを意味したが、いまやその闘いはエスニック・ナショナリズムの暴走を正当化するために利用されるというのだ。フランシスコ・ローマ教皇は歴史認識の欠如が深刻になると、結果として言葉が簡単に操作され民族間の憎悪を悪化させると警鐘を鳴らした。

本書は、反ユダヤ主義という根深い問題を歴史の文脈で粘り強く解きほぐす点で、中東や東欧の紛争だけでなく、米国ユダヤ人やトランプ氏とネタニヤフ氏との関係の綾を考える手がかりにもなる。

《評》東京大学名誉教授
山内　昌之

(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁止します。